My Name is Success

(C) Copyright 2002 Marketingtornado, Inc. All rights reserved.

むかしむかし、ある国に、３人のリンゴ売りがいました。

「他の２人よりもたくさんリンゴを売りたい」。

おとこは、心からそう願っていました・・・・・

リンゴをたくさん売りさえすれば、きっと良い暮らしが出来る。
そうすれば、妻も子供も幸せに暮らしていける。南国の海にも船に乗って遊びにいこう。
召使いを雇って、妻を楽させてあげよう。
かわいい我が子にも、オモチャをたくさん買ってあげよう。
リンゴをたくさん売って成功し、そして…。

おとこは、それに向かって、まいにち必死でリンゴを売りました。

「あっちのリンゴより美味しいよ！俺のリンゴは世界一！　そこの人、美味しいよ。買ってごらんよ。

本当に美味しいんだからさ」

毎日まいにち、一生懸命にリンゴを売ろうと、声が枯れるまで頑張りました。

頑張れば、確かに売れるのです。でも、声が枯れるまで頑張っても、たいして状況は変わりませんでした。

別のリンゴ売りは、おとこより値段を安く売っていました。
どうやら、リンゴ農園から安く仕入れているうえに、安く売っているようなのです。
どう考えても、たくさん売らなければ生活するには足りないはずでした。

「あんな安売りをしやがって…。　あんな安売りをしてしまえば、あのリンゴ屋だって苦しいだろうに…。　迷惑だな…」

もうひとつのリンゴ売りは、大きなお店で、リンゴをとっても美しく飾って売っていました。店構えも立派なものでした。
リンゴの売り子も、とても可愛い女の子を、何人も雇っていました。

リンゴを売る数も半端ではありません。
お金にものを言わせて大きなリンゴ農園まで持っているというのです。
大きな店の主は、隣の国の王様の親戚で、とてもお金をたくさん持っていたのです。

「あそこは大きい店だしなぁ、いいなぁ、あんな立派な店なら、女の子も働きたいよな。うちみたいな店じゃぁ、働きたい人もいない。でも見てろよ！　きっとあんな風に俺だって大きくなってやるんだ！」

おとこは、毎日、毎日、声が枯れるまで頑張り続けました。

おとこが頑張ると、確かにリンゴは売れました。でも、頑張っても頑張っても、なんとか生活を普通にしていけるぐらいでした。

おとこは、悩んでいました。
今のやり方をどれだけ続けても、今よりも大きく商売が育っていくなどとは、おとこには思うことができなかったのです。それに、近くに4件目のリンゴ売りが増えることがあったら、また競争が激しくなるかも知れません。

何より、おとこは、自分が病気にでもなったらと心配で仕方がなかったのです。

「どうしたら、他の2人よりも数多くリンゴを売ることが出来るのだろうか…」

ある朝、おとこが起きると、子供が嬉しそうな声でやってきました。
「パパ！　おはよう！　ねぇねぇ、パパの美味しいリンゴジュースが飲みたいよ。作って！」
「よし来た！　特別に、とびっきり美味しいやつを作るぞ！」

おとこは、可愛い我が子のために、今日売るはずだった一番良いリンゴを取り出して、ジュースにして我が子に飲ませました。

「うわぁー、おっいしいい！パパすごい！」
「そうだよ。パパのリンゴは世界一なんだ！」
「ねぇねぇねぇ、パパぁ…」
「あっ、ごめんな。お店の時間なんだ。行って来るから、良い子で待ってるんだよ。お前たちのためにも、パパ頑張ってくるからな！」
「うん、いってらっしゃい」

おとこは、必死で、必死で頑張りました。毎日、声が枯れるまで頑張りました。
しかし、だんだんとつらく思えてくる日もあったのです。
毎日まいにち、おとこが必死で頑張るのは、不安と恐れから逃れるための必死さでもあったからです。
元気そうに頑張っている姿とは裏腹に、苦しくて怖い気持ちを我慢して頑張っていたのです。
売れない日が何日か続いたりすると、おとこは、不安でいたたまれないのです。

ある日、お客さんもほとんど来ないような時間に、ひとりの老人が通りかかりました。
「そこのご老人。美味しいリンゴはどうだい？　本当に美味しいよ」
「ん？　なんだい？　リンゴか。美味しいのかぃ？」
「あぁ、当たり前だよ。俺のリンゴは…」
「ふむ。世界一か？」

誰なのだろうか？　この老人は？

「おいリンゴ屋。お前は、金が欲しいのか？」
「なんだよ。突然に…。そ、そりゃ、欲しいよ。食ってかなきゃいけないし」

「食っていくだけなら、今でも食っていけるじゃないか」
「そりゃそうだ。でも…」
「でも？　もっと金があれば…か？」
「・・・・・・」
「リンゴ売りよ。それならお前は、自分だけ儲かれば、それで良いのか？」
「？・・・・なにを言ってるんだ。誰だよ。あんた。リンゴは買うのかい？　お爺さん」
「ほぉ…。せっかく、これをお前にやろうと思ったが…」

「なんだよ。その本…？」
「この本には、成功の方法が書いてある」
「なんだって？成功する方法だ？　ちぇっ、うそくせぇな。見せてみなよ」
「約束するか」
「はぁ？　約束？　なにを？」
「人々を幸せにすると、約束するか？　そしてお前は、真の成功者になると誓うか？」
「無理だよ。何を考えてんだ！　いったい何人の人々がこの国にいると思ってるんだい！　俺1人で何ができるって言うのさ」

老人は話し始めた。

確かに1人の力は、たかが知れている。

でも、大したことが出来ないからと言って、やらないで良いという事ではない。
人々を幸せにしようと心から願い、その結果、例え1人しか幸せにすることが出来なくとも、それは約束を守ったことになる。

「ひとりでも？　それならいいよ。守るさ。本当にタダなんだよな？」
「よかろう。ほれっ、今日からはお前のものだ。代わりにリンゴをひとつ頂いていくぞ」

「あっ、くそじじいめ。こんな本で、リンゴ一個くすねていきやがった。この手でいろんなもんを騙してんじゃないのか？」

その３０日後、おとこの店は、ひとだかりが出来ていました。

大繁盛していたのです。

「はい！ありがとうございます。毎度あり！」
男は忙しくしていました。楽しくて仕方がないようすでした。

おとこは、本を読み、ひとつのアイデアを思いついたようなのです。

美味しいリンゴを、小さく切って、試食を派手にやっていたのです。希望する人にはリンゴジュースにして試飲してもらうこともしていました。
食べれば確かに美味しさは伝わります。だからこそ納得して買っていく人がとても増えたのです。もちろん試飲や試食をして買わなかった人もいましたが、おいしい評判を立ててくれました。

おとこには、わかってきたのです。

お客さんが、何を嫌がるのか、そして何を望んでいるのか。
そして、それを知ることが、どれだけ大切なことなのか。

老人からもらった本には、こう書かれていました。

【我が子を救うは説得話にあらず。おとぎ話也】

おとこは、最初は意味がわかりませんでした。
しかし、よく考えていくと、様々なアイデアが湧いてくることに気付いたのです。

確かに、薬を嫌がる息子もそうだ。「いいから薬を飲みなさい」と説得しても駄目。
むしろ甘いリンゴジュースに混ぜたほうが、息子の体は良くなる。
息子は、それでも一気にゴクゴクとは飲まなかったな。最初は味見をするかのように、ペロっと舐めていたっけな…。

それなら、まずは試食なら？　リンゴジュースの試飲なら？

「そうか…、我が子を愛すると同じなのか…」
「お客さんの気持ちを察すること、思いやる力こそが、何よりも大切だった…。」

それ以来、たった1行の言葉から、おとこは様々なアイデアを出し、とても評判のリンゴ売りになっていきました。

ところが、ほどなく、おとこのやり方は、他のリンゴ売りにもばれてしまいました。

似たようなやり方を、他のリンゴ売りが、真似しはじめたのです。
もちろんそれで、リンゴが売れなくなったわけではありません。でも、前ほどの勢いで伸びていくわけではありませんでした。
事情をよく知っているお客さんもいたようで、「同じようなやり方をマネしただけだよ」と、味方をしてくれるお客さんが、ありがたくて仕方がありませんでした。
「どうしたらいいものか…」

そしておとこは、休みの日に、また本を眺めました。

以前に読んだときに目に入った、たった1行の言葉が忘れられなかったのです。

【己を真に知る者、天の示す道を知る】

おとこは悩みました。

己を真に知る。確かに、世の中には、「あの人はあの仕事をするために生まれた」と言われるような人がいる。

しかしだ、彼らはどうやって自らの特別さに気付いたのだろうか…。俺は？　どうすれば？

天の示す道？　天はすでに道を示されていると？

なぜ生まれ、なぜそこに育ち、なぜその親を選び、なぜその人と出会い、なぜ今、それをしているのか？　それにすべて意味があるとでも？

もしそれに意味がすべてあったとしたら、天の定めた己の宿命を見いだせるとでもいうのか…。

リンゴ売りは考えました。毎日まいにち、そればかり考えました。

馬鹿げていると思うこともありました。本当かも知れない気持ちもありました。

でも、日々の仕事をおろそかにするわけには行きません。だから、とても時間がかかりました。

それでもあきらめずに考え続けたのです。

おとこは、何ヶ月かかっても、答えを見いだしたいと心から望んだのです。

私の父は、野菜売りだった。

もし仮に、馬具売りや、ナイトの息子に生まれていたとしたら、私はリンゴ売りはしていないかも知れない。

私の友は、ナイトの家に生まれた。ナイトにはナイトの大きな野望があるのだろう。

それが理由なのか、友は「盾」を売る仕事をしている。

彼は、「最も強いナイトになるなら、この盾を！」と世に問い掛ける。

まるで父親と立場は違っても、強さを追い求め、栄光を追い、人々を守り、命をかけて戦う、その大きな宿命に、一族をかけて取り組んでいるようにもみえる。

そして私の父は、野菜を売っていた。ならば、野菜売りをせよと天はおっしゃるのか？

でも、私はその野菜が苦手だったのだ。
小さな子供がみな苦手であるように、私も苦手だったのだ。
おとこは、自分がリンゴ売りになった思い出を、ゆっくりと思い出していました。
そうだ。私は野菜が嫌いだったのだ。
母親は、そんな私に、「野菜」が食べられるようにと工夫をしてくれた。
野菜嫌いな私に、野菜がといっしょに甘いリンゴをすって混ぜて飲ませてくれた。
私にとってリンゴは、母親の優しさの味だったのだ。
何よりも、そのリンゴの美味しさには、母の愛情がこもっていた。美味しいと飲む私を、優しい目で包んでくれた。栄養だってある。甘い。みずみずしい。美味しい。虫歯にもならない。嫌いな野菜だって一緒になれば飲めるんだ。
だから、小さな頃から、リンゴは世界一の食べ物であるという考えが私に出来上がって行った。
まずいリンゴじゃそうはいかない。だから、おいしいリンゴだけにこだわって売りたい。

一ヵ月後、その男の店は閉まっていました。
誰もが心配し、廃業してしまったのかと思っていたのです。
しかし、三〇日も経つと、おとこの店には、恐ろしい人の数の行列が再びできていました。
おとこの店は、リンゴジュース屋になっていたのです。
「家に持って帰っても、あのリンゴジュースだけは、色が黒くならないんだ」
「しかも、もの凄く美味しいんだ。家で作ってもあの味にはならない」
「どうやってやっているんだろう。まるで魔法だ。また飲みたい」
黒くならないリンゴジュース屋。それは国では初めてのお店でした。
ライバルたちも、すぐに真似をしようとしました。
しかし、物まねのリンゴジュースは、家に持ち帰ると、すぐに黒くなってしまいました。

おとこのリンゴジュースだけが、不味くならなかったのです。
それは、レモンが入っていたからでした。
おとこの母親は、とてもすっぱいライムとレモンを、ほんの少しだけ入れる事をしていたのです。そのさじ加減は、誰にも真似出来ない、母親の秘伝でした。
毎日それを見ていたおとこは、それをなんとなく知っていたのです。
誰も気づきはしないほどの量が入っていました。
でも、それが入っているからこそ、美味しさが違うのです。

おとこのリンゴジュースは、しばらくの間、誰も真似できませんでした。
おとこの店は行列が出来ました。
隣の町にも店を出しました。お店は2件に増えました。
隣の国にも店を出しました。
国王からもよく注文が来るほどになっていました。店はどんどん増える勢いだったのです。

「そうか。天はこの道を、すでにご用意下さっていたのだ。私は、この道を進むために、今ままで生まれ、育ち、知り、学び、笑い、苦しみ、悲しんできたのかも知れない。」

「これこそ、母が作り、父が喜び、私を育ててくれた愛が、数多くの人の笑顔を作り、私によって花開こうとしているのだ。それが富をも与えてくれるとは…」
おとこは、必死で頑張りました。社会的な成功を手中に収めようと、面白くて仕方がなかったからです。目の前の、富と、名声と、数多くの感謝を手に…。

ある日のこと…。
「思えば、随分と忙しくしていたものだ。もう5年も働きづくめではないか…。」

ようやくお店が軌道にのって、おとこは、自分の時間を作ることが出来るようになりました。
ようやく、おとこは戦いのような激しい日常から、息を抜くことができるようになったと思ったのです。

おとこは、息子がずいぶんと大きくなっている事に、気付きました。毎日、家に帰っていたはずなのに…。

おとこは、家族とともに、一緒に晩御飯を食べていました。
でも、おとこは、息子と何を話せば良いのか、どうやって話せば良いのか、それがわからなかったのです。つまらなさそうな顔をされ、どう接すれば良いのか、おとこにはわからなかったのです。
気づけば、妻との心からの会話も、忙しさのあまりにしていませんでした。
妻の語る話に聞く耳も持つ余裕さえありませんでした。
親しかった友達も、仕事が忙しくて疎遠になっていました。
「誰だって…。しょうがないさ…。こうするしか…。」

富と名声と感謝を追い求める間に、自分の内側にあったはずの大切な人に、真意を伝えられないまま、随分と心の距離だけが離れてしまったような感じがしたのです。

厳しい世の中で、息子のために、家族のために、自分の価値を証明するために、息をつく間もなく頑張ってきたのです。にも関わらず、家族との距離がこれほどまでに…。

【真なる成功は、天秤にある】

富が得られれば、社会で成功すれば、それだけを目指していたのは間違いだったのか？

内側が満たされた感じを、私はおろそかにしていたと言うのか？

おとこは、その意味がようやく理解できたような気がしました。
友達、家族、とても大切だったはずのものを、心の片隅に追いやり、その花に水をやらなかったことを後悔しろというのでしょうか。
確かに、天秤にオモリをのせるときには、片方を重くすれば、片方が浮くに決まっている。

より多くを求めれば、より大きなバランスを求められるものなのか…。
そんな器用な人間なんて、本当にいるのだろうか…。
おとこは、随分と大きなオモリを天秤の片方に乗せてしまったことに気がついたのです。

我が子は、大変な想いをしたのだろうか。寂しい想いをしたのだろうか。
国王から呼ばれるほどの名声を得た父親を持ち、息子は大きなプレッシャーを感じたのだろうか。
我が息子が多感な時期に、好きな女の子が出来ても、相談に乗って上げられなかったのがいけなかったのだろうか。
きっと寂しい想いをさせたのかも知れない。
それに、妻が私に悩みを語りたいとき、私はそばに居てあげられなかった。きっと息子のことでも、

いろいろと話し合いたいこともあったに違いない。
でもそれが、家族の役割分担であり…。でもやはり、家族は協力しあって…。私は協力しあっただろうか…。

そうなのか…。
私がもっとも大切だと思っていたにも関わらず、私自身がそれを遠ざけていたようなものなのか…もう後悔しても遅いのか…
もう、取り返しがつかないのだろうか・・・

本当に、私が望んでいた成功は、これだったのだろうか…
私がやってきたことは正しかったのだろうか…

そういえば、この本をもらった老人は、身なりを見る限り裕福ではなかった。貧相ではないものの、取り立てて派手な格好はしていなかった。
真の成功者であるはずなのに…。

「そうだったのか…」

でも、何とかなるはずだ。
私は家族を愛している。私の真意が伝わらなかっただけで、誤解されているだけで、私が妻や息子を世界でもっとも大切にしていることは間違いないのだ。

私には愛があった。
息子を世界中で誰よりも大切に思っていた。妻を誰よりも楽にしてあげたかった。

私には友がいた。酒を交わし、馬鹿を言い、互いに励ましあった。職業も金も地位も関係なく、心から相談できる友がいた。

「どうすれば…」
突然、目の前が真っ暗になり、体をゆすられるような感じがした。

おとこは、起きた。
「ちょっと、いい？このリンゴを下さいな」

「はぁ…」
周りを見渡せば、そこは、いつものリンゴ屋でした。見慣れた店。いつお座っている椅子。いつも眺めている景色…。
おとこは、本を読みながら、うたたねをしたのだった。
「今のは、すべて夢だったのか…」
社会的な成功を収めたのに、その代償があまりにも大きく感じたのは、何よりも恐怖でした。
社会的な成功と、内側の充足を、同時に満たしていく。その大切さを感じながら、大きく息を吸って、おとこは目を閉じました。
ただ富だけを、ただ名誉だけを、それだけを追い求めるのは別に悪くない。
夢から覚めたとはいえ、現実は、やはりそれを必要とするのは変わりないからだ。
しかし、内なる満たされた感じを犠牲にしてまでも、社会的な成功を追い求めるのは、ともすると取り返しがつかないことになるのかも知れないのだろうか…

頭ではわかる。でも私は、やはり、これからもリンゴ屋を大きくして行きたいと願っている。
その準備として、私は、このことを本から学んだのかも知れない…
おとこには、もう、本は開く必要がなくなっていました。
夢とは思えないほど鮮明に、成功への軌跡を覚えていたからです。
でも、おとこは、今日だけは、早々と店を閉めました。
そして家に帰り、子供を呼んで、一緒に遊ぶ事にしたのです。
「久しぶりに、遊ぼう。息子よ。知らぬうちに大きくなったな…」
「パパは、お前のことを心から愛しているよ。出来るだけ一緒にご飯を食べよう。出来るだけ一緒に遊ぼう。お前が生きていることこそが、パパの誇りであり、生きがいなんだ」
「妻よ。困ったことはないかい？忙しくて迷惑をかけるが、それも家族のためだと思っている。もちろん私自身の栄光のためでもある。しかし、それを優先するがあまりに、妻であるキミと、話をする機会さえも失うことは、私の真意ではない。忙しすぎることがあっても、何かあれば、妻を優先する。

いつでも呼び止めて欲しいのだ。何かひとりでは解決できそうもないと思ったら、いつでも頼りにして欲しいのだ。」

おとこは、これを満月を見るたびに、いつも家族に言い続けることにしたのです。

夢では、社会的に大成功を収めたおとこは、その後、一〇年の歳月をかけて、ゆっくりとリンゴジュース屋を続けていきました。
豊かな生活は送りましたが、決して巨万の富を手にする程ではありませんでした。
南国の海へと、豪華な船で旅することもありませんでした。

国じゅうにその名を知られるまでにはならなかったものの、おとこのリンゴジュースは、末永く、数多くの人々に笑顔と元気を分け与え続けました。
そうして、良き夫であり、良き父親であり、実業家としても人々から祝福を受け、それでおとこはとても満足をしていました。

それからも、数多くの人々が、その本を手にしたといいます。

馬鹿にする者、否定する者、後悔する者、さまざまな人の手に渡りました。
そうして、さまざまな人々の手に渡りながら、その本は、姿を買え、形を変えて、人々に語り続けました。

その本を、あなたも見たいと思うのでしょうか？

さて、どうでしたか？

このリンゴ売りの話を聞いて、あなたはどんなふうに思われたでしょうか？
成功をめざして頑張っている方には「センチメンタルな話しだ」と思われているかもしれないなぁ…。
私は今、そんな風に思っています。

もしかしたら、
「なにを甘っちょろいことを…、そんなことでスピードが求められるビジネスという戦いに勝てるとでも…」とも感じていらっしゃるかも知れません。

でももし、そうお感じであったとしても、もう少しだけおつきあいいただけないでしょうか。
その後でご判断いただいて構いません。
最後まで私と意見が違うとしたら、仕方がありません。
どうぞこの本は捨ててください。

実をいうと私は「成功」や「幸せ」というものの正体について、最近考えることが多くなりました。

私は、マーケティング・トルネードという経営コンサルティング会社を経営しています。
社名からもおわかりの通り、業績を上げるためのコンサルタントです。

だからこそ、クライアントさんの多くは、
私に【社会的な成功】をするための支援を望んでいらっしゃいます。

社会的な成功？
そうです。私はそれを次のように定義しています。

【社会的な成功】＝【お金が儲かる】×【名声が得られる】×【数多くの方々から感謝される】

ちなみにこれは、すべて掛け算なのです。
【お金が儲かる】だけ、
【名声が得られる】だけ、
【感謝される】だけ
であれば、話は簡単だし、手に入れやすいのです。
しかしこの掛け算の成立はなかなか難しいのです。
ボランティアで感謝だけを手にする人は、名声が得られないからこそ、より多くの感謝を得ようとエスカレートします。
お金儲けだけを追い求め、感謝が得られず、より多くの富を求めてエスカレートし、バランスを崩す

方もいます。

そうです。この掛け算を成立させることは、なかなか難しいのです。でも大切なのです。

だから、私はただお金儲けだけのアドバイスはしません。私は常に、クライアントさんが【社会的な成功】を手にする事ができるように、徹底してお手伝いしているのです。

そして【社会的な成功者】を生み出すことによって、
私も社会的に成功する。
共に喜びをわかちあう。

それが私の日常でした。

こうして私は、比較的短期間の間に、多くの社会的な成功者を生みだし、
私自身も周囲からそう言われる存在になっていました。

地域の長者番付にものりましたし、

世界的に著名な方とプライベートで親しくなったりもしました。

しかし…。
山の頂上に立つという気分は、想像していたものとちょっと違っていました。
下から「いつかあの山を登るぞ！」と思っていた時には、頂上に登ればすべてが手に入ると思っていました。

成功すれば、幸せになれると…。

しかし、**《社会的な成功》イコール《幸せ》ではありませんでした。**

その思いは、私だけではありませんでした。私以上に社会的な成功をおさめている方でさえ、ほとんど同じ想いをしている事がわかったのです。
私は心理学的な観点からマーケティングを行うために、セラピストのトレーニングも受けています。
それを知っているからこそ、私にそうした相談があり、それがきっかけで気付いたのです。

「近寄ってくるのは金をあてにする奴らばかりで、本当の友達がいない」

「家族と擦れ違って、もうその溝は埋めようがない」
「子どもはいつの間にか大きくなって、結局、親が必要な時期に何もしてやれなかった」
「家にいても、仕事をしていても、いつも孤独感を感じている」

そして異口同音に言うのです。
「お金儲けなんか、しなきゃよかったのかもなぁ…」。

…イヤミに聞こえるでしょうか？　でも、これが彼らの正真正銘の本音なのです。

それに気づいてから、私は自分自身の仕事に疑問を抱き始めてしまいました。
「私の仕事は、本当にクライアントさんのためになるのか？」
「本当に人を幸せにしているのか？」
この疑問だけが、ずっと心の片隅から消えなかったのです。

そうとはいえ、目の前に山があれば、登ってみたいと思うのが人間の心情です。

先に登った人たちが、そこから見える風景を伝えてあげたとしても、

《山に登ったからといって幸せになれるわけではない》と言ったとしても、
「今のみじめな気持ちよりも、ずっといいじゃないか。　そんな贅沢な悩みを自分も言ってみたいよ」
と思うのが普通なのです。私もそうだったのです。

私はジレンマを感じていました。

ここに、どうしても山に登りたい人がいて、社会的な成功を求めている人がいて、
私は、彼らの山を見つけ、登らせてあげる支援をすることができる。
とはいえ、その一方で、彼らの幸せを考えると、
山の頂上に立たない方がいいかもしれない…。

これは私にとって大きなジレンマだったのです。
「お金儲けという手段を教えることによって、人に幸せになって欲しい」
そう思ってはじめた仕事でした。
ところが、お金儲けをすると幸せになれない事があるなんて！

私のジレンマに、明確な答えなんて見つかりませんでした。

ある意味では当たり前です。
「人が幸せになるために、私はどうすればいいのか？」
そんな神様みたいな事を考えていたわけですから…。

でも、ある時、気付きました。

全部がわからなくても構わない。できることからはじめよう。
わかっていることだけでもはじめよう。

私は、ビジネスという場でいかにお金儲けをするかを徹底的に研究してきました。
消費者心理を読むという観点から人の心について勉強しはじめ、
次第に、トラウマ、心のわだかまり、サバイバル力と学びを深くし、セラピストというもうひとつの顔も持つようになりました。

心理学とマーケティングを両方知っている私だからこそ、できることがあるのではないか？

そして、だんだんとハッキリしてきた事があるのです。

社会的な成功を目指すのが悪いわけじゃない。内的な充実ばかりが大切なわけでもない。
その真ん中に、答えらしきものがあるんじゃないかな。

「社会的成功」と、「内的充実」が共に存在する時、本当の意味で心が満たされた感じがするんじゃないかな。

私は「幸せ」とか「心が満たされた感じ」とは、そういう状態だと思うようになったのです。

《社会的成功》だけでは十分ではありません。
さらに大切なのは、内的充実だと思うのです。
・友人とのたわいもない会話、
・家族との健やかな時間、
・大好きな子供たちとの幸せなひととき、
・自分自身のプライベートの充足感、

そういったものも同時に大切にしていきながら、心の内側も充実していること。
これを両方手に入れてはじめて、心が満ち足りた感じとなり、幸せを感じるのだと思うのです。

でも、もちろん、これだけじゃ抽象論です。
では、具体的に何をしていけばいいのか？

リンゴ屋が選んだ道のように、ゆっくりと歩んでいけばいいのでしょうか？
いえいえ、走りたい人はどんなに注意しても走りたいのです。
学校の廊下と同じで、歩くより走る方が楽しいのですから（笑）

「世の中、大切なのはお金だけじゃないよ」と頭ではわかっても、「成功したい。稼ぎたい」という感情を無くすことなんて出来ないのです。
頭ではわかっても、社会的な成功を追い求める気持ちにはブレーキはかからないのです。
歩みを遅くしろ、と言っても効果なんて無いんです。

それは皮肉なことから思いつきました。

「心配ないですよ。ちゃんと家族サービスしてますから…」

熱狂的に働き、家庭のための時間を無くしているクライアントさんほど、よくこう言うのです。
だけど、本当の家族サービスは、どこかに連れて行ってあげたり、何かを買ってあげることではないです。たぶん。

少なくとも子供に関して言えば、子供自身が、本当に心から愛してもらっている事をことを実感できること。その子供を大切にすること。思いやること。
一緒に居てあげること。抱きしめてあげること。
話を聞いてあげること。一緒に笑ってあげること。
そっちのほうがよほど大切なのです。

しかし、忙しくしている彼らは、そうした日常はおくれていないはずなのです、たぶん。

ふと、私は思い出しました。
私の父と母は、共に優秀な経営者だったことを。
そんな父と母に育てられたからこそ、私は「マーケティングコンサルティング」の分野で自分だけの山を見つけ社会的に成功しました。感謝もしています。

でも、幼い頃の私自身は、父も母も不在がちな自分の家で、寂しい想いをしていたのです。
父は私と過ごせなかった時間について、どう思っていたんでしょうか。
そして私にもかわいい子供がいます。
仕事で忙しく、遊んでやれないこともあります。
しかし、私の父としての思いは伝えておきたいと思うのです。
だからこそ、私と同じように、社会で一生懸命働くお父さんに、
その真意を伝えられない不器用なお父さんに、
子どもへの気持ちを伝える一冊の本を書いてもらおうと決めました。
時間はないけれども、子どもを愛していることを伝えてもらおう。
歩みのスピードは止められない。社会的な成功を求める気持ちは抑えられない。

でも、世界で一冊の本を書いてもらうことで、バランスを少しでも取ってもらえたら…。それだけでもスタートしよう。
キミが生まれた時、うれしくて泣いてしまったこと。
もみじのような小さな手を握って、神様に感謝したこと。
お乳の匂いのする柔らかい頬にほおずりするのが大好きだったこと。
夜遅く帰ってから、一緒にお風呂に入るのが最高の楽しみだったこと。
最初に「パパ」って言う言葉を聞いたとき、涙が出るほどうれしかったこと。
「きょうもおそい？」と悲しそうな顔をされるとつらかったこと。
運動会に行けずに、キミに泣かれて本当に申し訳ないと思ったこと。……
いろんな想いがありながら、きっと不器用で伝えられないだけなんです。
その本を手にした時、子どもはきっと忙しかったお父さんのことを理解してくれるはずです。
お父さんなりに必死に生きて、自分を愛していたことをわかってくれるはずです。

大切に書いた文章を、愛情の変わりに何度も読み直してくれるはずです。
そしてそれは、子どもがこれから生きていく心の糧になります。
心強い味方を手に入れたと実感できるのです。
その1冊から、父親の本当の愛情を心から感じるのです。

このアイデアは、単なるアイデアではありません。統合的心理臨床のセラピストも、その効果にお墨付きを下さいました。私はそれが何よりも心強かったです。

もちろんその本が、共に過ごせなかった時間をすべて埋めてくれるとは思いません。
できることならば、家族のための時間も作ってください。
でも、体はひとつなのもわかってます。だから、それができないのであれば、何もやらないよりはずっといいはずなのです。

もちろん、子どもへの手紙である必要はありません。
奥さん、あるいはダンナさん、友人への手紙でも構いません。
重要なのは、
「キライだから放っておいたんじゃないんだ。

こんなに大切に思っていることをわかってほしい」
という素直な気持を伝えることなのです。

これが、現在の私ができる、人の「内的充実」への支援の第一歩です。
印刷代、郵送代、製本代、執筆システムの開発費、そのための費用はすべて当社が無料で提供します。
私が稼ぐ売上の一部を、そうして社会に還元していきます。

そうすれば、クライアントさんに、徹底的に忙しく働いてもらっても、少しはいいはずです（笑）

私のスタッフも快く賛成してくれました。
私の師でもある心理学者も絶賛してくれました。

「お金儲けをして幸せになってもらいたい」
そんなコンサルタントとしてスタートをして、随分と遠回りをしてきたのかもしれません。

でも、お金儲けだけじゃなく、外側と内側の満ち足りた感じを、同時に手に入れてもらえるような、
そんなコンサルタントになりたい。

今はそう思うのです。だから、外側と内側の両方のサポートをしていくのです。

遠回りでしたが、それで良かったと思っています。

とても安らかな感じがするからです。

あなたの経済的な成功だけでなく、心からの笑顔を、私は祈っています。

私は、いろんな事を、この本で伝えたかった。それが少しでも伝わってくれたら、願いは叶ったことになります。それが、私の天職なのです。

弊社の活動：

●社会的成功（=「お金」×「名声」×「感謝」）へのサポート

株式会社マーケティングトルネードでは、コンサルティング、各種教材などを通じて、社会的な成功へのサポートを徹底して行っています。

また、著者発掘・プロデュース事業、ホームページ制作なども行っています。

ホームページ・・・http://www.marketingtornado.co.jp/

●内側の充実へのサポート

佐藤によるメンタープログラムの実施

「男と女はどうしてこんな事で悩むのか?」オーディオ CD の企画・制作・販売

「世界で一冊の宝物」プロジェクト活動の実施

ホームページ・・・http://www.love-you.jp/

他、様々なコンテンツ・企画を計画中です。

さて、これからも皆さんと一緒に、肩の力を抜いて、天職を楽しんで行きたいと思っています。よろしくお願いします。

株式会社マーケティングトルネード代表
佐藤昌弘

My name is Success.

2005 年 11 月　初版発行
発行所：株式会社マーケティングトルネード
(C) Copyright 2005 Marketingtornado, Inc. All rights reserved. No reproduction without written permission.

出版：株式会社マーケティング・トルネード出版事業部
http://www.marketingtornado.co.jp/
NOT FOR SALE